

事態認知モデルを用いたインドネシア語の接頭辞 *ter* 派生動詞の考察

佐近優太(東京外国語大学[院])

1. はじめに

インドネシア語にはいくつかの接辞が存在するが、その中でも接頭辞 *ter*-はその複雑な振る舞いから多くの研究対象となってきた。本稿では接頭辞 *ter*-派生語の中でも動詞的に使われるものに焦点を当て、Langaker(1990)及び谷口(2005)の事態認知モデルを用いることで、*ter*-派生動詞が表す意味を統一的に説明できることを示す。本稿の構成は以下のとおりである。第2章では議論の前提として接頭辞 *ter*-についての基本知識及び、意味間の関係性を考察した先行研究を確認する。第3章ではコーパスを用いて *ter*-派生動詞ごとの振る舞いをみる。第4章では観察の結果を事態認知モデルに落とし込むことで、*ter*-派生動詞の意味の関係性を把握する。第5章はまとめと課題である。

2. 議論の前提と先行研究

2.1. 接頭辞 *ter*-とその派生動詞について

接頭辞 *ter*-は語基につくことで動詞、形容詞、名詞を作るとされる。形容詞は *tertinggi*(*ter*+高い)「最も高い」のように最上級の意を表す。名詞には *tersangka*(*ter*+疑う)「容疑者」のような例があるが、その数は非常に限定的で非生産的である。本稿で焦点を当てる *ter*-派生動詞には受動形式を持つものと、能動形式を持つものが存在する。意味の種類には一定の合意が見られ、受動文には「可能」「非意図」「結果状態」の意味を、能動文は基本的に非意図の意味を認める立場が一般的である。(Sneddon 2010:116-124)。

(1) *ter*-派生語の基本的な用法(Sneddon 2010:116-124)

- a. *Surat itu ter-tulis dalam Bahasa Inggris.* 「この手紙は英語で書かれている」
letter that TER¹-write in language English (受動文・結果状態)
- b. *Maaf, pena=mu ter-pakai oleh saya.* 「すみません、あなたのペンは私が使ってしまいました」
sorry pen=2SG.POSS TER-use by 1SG (受動文・非意図)
- c. *Suaradosen tidak ter-dengar dari sini.* 「先生の声はここから聞こえなかった」
voice teacher NEG TER-hear from here (受動文・可能)
- d. *Latif ter-tidur di kelas.* 「Latifは授業中寝てしまった」
Latif TER-sleep in class (能動文・非意図)

2.2 先行研究と問題の所在

以上のような *ter*-派生動詞、特に *ter*-派生受動文の意味の関係性を提案したものには Rizki(2014)、湯浅(2002, 2004)、佐々木(1982)がある。Rizkiでは、*ter*-派生受動文は「結果状態」という概念を根底で共有しており、この点で同じく受動文を形成するが「動作」を焦点とする接辞 *di*-と対照的であると主張する。*di*-派生動詞では結び付けるといふ動作または行為が焦点となっている一方、*ter*-派生動詞では結び付けられているという結果状態が焦点となる。

(2) *di*-派生動詞と *ter*-派生動詞の違い(Rizki 2014: 51-52)

- a. *Titik A dan titik B {di/ter}-gabungkan dalam satu garis.* 「A点とB点を一つの線に結び付けた」
point A and point B {PO/TER}-tie in one line

一方で湯浅(2002, 2004)は *ter*-派生受動文の共通領域が「行為の非意図性」にあると主張した。これによれば *ter*-派生動詞文は、「いずれも意図的に行為を行った動作主はおらず、それ故、対応する能動文がない。これらはどれも誰かが故意にそうしようとしたわけではないのに自然とそうなった、という成り行き的なナル型タイプである」(湯浅 2004: 88)とされる。

しかしこれらの分析には問題もある。湯浅の分析は動作主の非明示化から非意図という意味を導いているが、必ずしもそうは言えない場合がある。例えば、(1a)の文では意図的に英語の手紙を書いたという解釈が一般的であり、間違って手紙を書いたとは考えにくい。一方 Rizki の分析では、*ter*-派

¹ 本発表での接頭辞 *ter*-の略号は便宜上 TER に統一する。

生能動文が別個のものとして扱われている。Rizki の議論では動詞が表す事態に「動作→結果」があるものが前提とされており、(4a)のような能動文的用法を捉えることができない。以上より 3 つの意味に共通の意味を見出す方法では、その連続性を捉えることは難しい。

佐々木(1982)は *ter-*の機能を「行為者側への否定的効果」と定義し、それが *ter-*派生動詞の意味を動機づけていると主張する点で本発表の主張に近い。しかし具体的な派生プロセスについては言及していない。そこで今回は動詞によって *ter-*派生動詞のとりうる意味が違うことに注目する。例えば *terbuka*(*ter-*+開ける)は「結果状態」「非意図」「可能」の 3 つの意味が観察できるものの、*ter-hindarkan*(*ter-*+避ける)は「可能」的にとらえることしかできない(Sneddon 2010:122-123)。ここから本発表では *ter-*派生動詞に共通の意味を認めるのではなく、接頭辞 *ter-*が動詞の事態概念と作用することで、異なる部分が顕在化するという立場をとる。特に結果状態の顕在度合いによって、接頭辞 *ter-*の機能として設定する「動作主の背景化」が事態概念に及ぼす影響に違いが生じ、意味に差が生まれると主張する。またこれは能動文にも受動文にも当てはまることを、事態認知モデルを用いて確認する。

3. 調査

3.1 調査方法

今回はインドネシア語 web コーパスである Malindoconc²を用いて調査を行った。調査対象となる動詞は Sneddon(2010)による *ter-*派生動詞の例文及び角田(1991)の二項述語階層による他動性の分類を援用し、動詞の対象に対する「影響度」をもとに選出した。この *ter-*派生動詞を検索にかけ、用例を意味ごとに分類する。数が多いものに関しては最初の 100 例を確認する。*ter-*派生動詞の意味は基本的に発表者が文脈から判断し、インフォーマントのチェックを受けた。また動詞の影響度について、まず行為によって対象が直接影響を受けるか、状態変化を含蓄するかで分類した。これに次ぐ動詞群である知識は、直接影響なしの動詞群に含めることもできるが、実体のあるものを対象にとりにくいという³点で、区別を行っている。最後に動詞が 1 項しかとらず対象が存在しない動詞群を最も影響性が低いと位置付けた。

ただし、非意図の意味については今回以下のような判断を行った。

- (3) *Buku saya ter-bawa oleh Taro.* 「私の本を太郎が偶然持って行ってしまった」
 book 1SG TER-take by Taro (湯浅 2004: 11)

(3)において湯浅は日本語訳にも表れているように、非意図の意味を積極的に認めている。しかしこれは同時に「太郎が悪意をもって私のカバンを持ち去った」のようにも解釈可能である。つまり非意図か否かは文脈に依存し、*ter-*派生動詞自体は非意図に対して中立的といえる。これより、本稿では「非意図」の意味を能動文的用法にのみ認め、受動文的用法では結果または可能かどうかを判断する。

3.2 調査結果

コーパス調査によって採集された用例から抜粋したものが(4)から(8)である。これらは下の表のようにまとめることができる。

(4) 直接影響・変化あり

- a. *Pintu itu ter-buka kembali.* 「そのドアは再び開いた」
 door that TER-open again
 b. *Dia ter-bunuh di Dallas.* 「彼はダラスで殺された」
 3SG TER-kill in Dallas

(5) 直接影響あり・変化なし

- a. *Jubah=nya ter-injak.* 「彼のローブは踏まれた」
 robe=POSS TER-step.on
 b. *Reid ter-tembak di bagian leher.* 「Reid は首を撃たれた」
 Reid TER-shoot in part neck

(6) 直接影響なし/知覚

² 詳細はスライド参照。MALINDO Conc (<https://malindoconc.lagoinst.info/concordance/en/>)

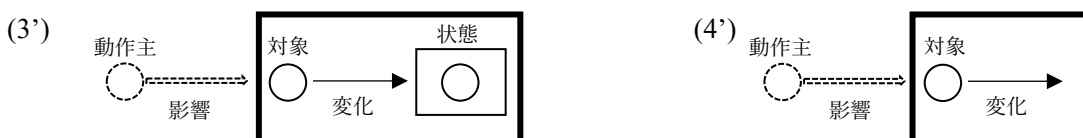
³ 次の例を参照。**Tas saya ter-lupa.* 「lit. 私のカバンを忘れた」
 bag 1SG TER-forget

- a. *Keributan tak ter-hindari.* 「騒乱は避けられない」
affray NEG TER-avoid
- b. *Rindu ini tak ter-tahankan.* 「この思慕は堪えられない」
longing this NEG TER-stand
- c. *Komponen ini tidak ter-lihat oleh pengguna.* 「この構成要素はユーザーには見えない」
component this NEG TER-see by user
- (7) 知識・思考
- a. *Ia ter-lupa telah terjadi apa semalam.* 「彼は昨夜何が起こったか忘れてしまった」
3SG TER-forget already occur what yesterday
- b. *Ada faktor yang penting yang ter-lupa oleh Aristoteles.*
existfactor REL important REL TER-forget by Aristoteles
「アリストテレスが忘れていた重要な要因があった」
- c. *Tak pernah ter-bayangkan oleh=nya ada minuman lezat itu.*
NEG PERF TER-assume by=POSS exist drink luxurious that
「こんなおいしい飲み物があるなんて彼は思ってもみなかった(想像できなかった)」
- (8) 自動詞
- a. *Aku ter-jatuh ke bawah meja.* 「私は机の下に落ちた」
1SG TER-fall to under desk
- b. *Aku langsung ter-tidur di depan televisi.* 「私はテレビの前ですぐに寝てしまった」
1SG immediately TER-sleep in front TV

影響性	高			低(無)	
語基の意味	直接影響 変化あり	直接影響 変化なし	直接影響なし 知覚	知識・思考	(自動詞)
語基	buka(開ける) bunuh(殺す)	injak(踏む) tembak(撃つ)	hindar-kan ⁴ (避ける) tahan-kan(耐える) lihat(見る)	lupa(忘れる) bayang[-kan] (想像する)	jatuh(落ちる) tidur(眠る)
態	受動	受動	受動	受動/能動	能動
ter-派生動詞	結果状態・ (可能)	結果(状態)	可能	非意図(自発) 可能	非意図

4. 考察

例文(4)は対象への働き掛けだけでなく、その結果も含意するため、事態認知モデルは(4')のようになる。ここでは動作主背景化によって焦点が行為の対象の「状態変化及び結果状態」へ移行したことを表している。一方(5)の動詞は結果状態までは含意しないため(5')のように表される。

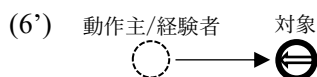


また先行研究では *terbuka* に可能の意味を認めていたが、今回可能の意味を認められるものはなかった。事実、インフォーマントによれば(9)は英語の中間構文のような「ドアが簡単に開くという性質もっている」という読みはできず、「(閉まっていた)ドアが開いた」という状態変化の意味のみが許容される。このように直接影響の動詞に可能の意味を認めにくいのは、結果状態に焦点が当たり、対象をフォーカスしにくいといるためと考えられる。

⁴ 語基 *hindar* には *ter-hindar* と *ter-hindar-kan* の二通りがあり、意味的には前者が「妨げられる」、後者が「避けられる」というように違いがみられる。しかし-kanの役割には様々な主張があり、他動性の減少が直接-kanに動機づけられているとは言いきれない。

(9) *Pintu itu ter-buka dengan mudah* 「このドアは簡単に開いた」.
 door that TER-open with easy

(6)の例は動詞が表す行為による対象への影響及びその状態変化がないと考えられる場合である。この場合、対象が変化する矢印もモデル上に存在せず、焦点は行為の対象の性質にあたることになる。



今回 *terhindarkan* と *tertahan* を調査対象としたが、前者は 46 件中 38 件、後者は 55 件中 55 件と否定辞との共起が多く観察された。これは可能用法が対象の特質を述べていなければならないという制約によるものと考えられる。例えば *tertahan* では、何かを耐えることができるのは動作主の能力に依存するが多いが、(6a)の場合は「思慕」を耐えることができないのはその思慕があまりにも大きすぎるなどといったそれ自体の性質によるものと考えられることができる。

次に自動詞の場合について考える。自動詞文には力が向かう先である対象が事態概念の中に存在しない。そのため主語は存在しなければ文として成り立たず、結果接頭辞 *ter-*の「動作主背景化」によって動作主の意図性のみが背景化し、非意図の意味が生まれる。



最後に、思考動詞は接頭辞 *ter-*をつけた場合に能動文的なもの受動文的なもの両方の派生動詞文を産出するという点で特異である。これは *ter-*派生動詞における受動文的用法と能動文的用法の中間に位置し、*ter-*派生動詞の意味の連続を裏付けているといえる。なお(7a)と(7b)の用法の差は確認できなかったが、インフォーマントによれば(7a)のほうが無標な印象を受けるとのことだった。また *terbayangkan* は否定辞を伴って「想像できない」という意味を持つが、これには受動形式のみが認められる。ここからも非意図と能動形式、結果状態・可能と受動形式という対応関係が見える。

5. まとめと課題

本発表では次のことを明らかにした。語基の動詞が持つ影響性が高ければ、*ter-*派生動詞は受動文を形成し結果や可能の意味を帯びやすくなる一方、影響性が低いものは能動文になり非意図の意味を帯びるようになる。そしてこのような差が出るのは動詞が表す事態によって、*ter-*派生動詞の機能により活性化される部分が異なるためである。

課題としては、今回コーパス調査では確認できなかった意味も、検索範囲を拡張すれば認められる可能性は十分にある。また今回は調査語彙数を限定したが、今後上の分類に当てはまらないものも出てくると考えられる。そのため最終的には、*ter-*派生動詞の意味は今回図示したように明確な境界を持つものでなく、より連続的なものであると捉える必要がある。そのために定量的な調査も行わなければならないだろう。

略号一覧

1: first person, 2: second person, 3: third person, NEG: negation, PO: patient-oriented, POSS: possession, REL: relative, SG: singular

参考文献

- Langacker, R. W. (1990) *Concept, Image and Symbol*. Mouton de Gruyter. / Rizki, Andini. (2014) 「事態連鎖から見たインドネシア語における *ter-*構文の働き—受動から外れる「結果状態」をあらわす *ter-*構文」名古屋大学. 博士論文. / Sneddon, J N (2010) *Indonesian: A comprehensive Grammar*. Australia. Routledge. / 西村義樹 (1992) 「認知言語学序説—意味論の可能性III」『実践女子大学文学部紀要』第 34 集. / 佐々木重次 (1982) 「インドネシア語における態の問題」『講座日本語学 10 外国語との対象 I』東京: 明治書院. 292-304. / 谷口一美 (2005) 『事態概念の記号化に関する認知言語学研究』東京: ひつじ書房. // 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』東京: くろしお出版. / 湯浅章子 (2002) 「日本語、インドネシア語における態と他動性」神戸大学. 博士論文. / 湯浅章子 (2004) 「'Volitionality' と 'Responsibility'—インドネシア語における 3 種の受動表現 'di-' 'ke-' 'ke-an'—」『甲南女子大学研究紀要第 40 号 文学・文化編』甲南女子大学